

## 乳幼児をもつ母親の被援助志向性に影響を与える要因の検討

藤岡 真紀<sup>1</sup>・清水 寿代<sup>2</sup>The help-seeking preferences of mothers with infants  
— The influence of internal working model and psychological distances —Maki FUJIOKA<sup>1</sup>, Hisayo SHIMIZU<sup>2</sup>

**Abstract:** This study examined the factors that influence the help-seeking preferences of mothers with infants. Participants (n=216) completed three questionnaire, which assessed the help-seeking preference, internal working model and psychological distances between an imminent person and expert. Help-seeking preference is comprised of “affirmative attitude” and “concerns and resistance”. The results showed the following: (1) “avoidance” of IWM was negatively related to “affirmative attitude” and positively related to “concerns and resistance”; (2) “anxiety” of IWM was positively related to “concerns and resistance”; (3) “psychological distance from mother to helper” was negatively related to “affirmative attitude” and positively related to “concerns and resistance”; (4) when there is a difference of the psychological distance, help-seeking preference was lowered only in the case of an imminent person. These results suggested that the help-seeking preferences could be raised by building close relationship with a specific person although there was the effect of internal working model.

**Key words:** help-seeking preference, internal working model of attachment, psychological distance

## 目 的

育児において母親は様々な子育てに関する悩みや問題を経験するが、これらに対処できず解決できない状況が続くことは母親のストレスや不安に繋がる。母親の育児ストレスや育児不安の緩衝要因としてソーシャルサポートの有効性が指摘されており（北村・土屋・細井, 2006；荒牧・無藤, 2008），母親が自分だけで対処出来ない場合には、他者からのサポートを得ることが問題の悪化や悩みの深刻化を防ぐことにつながると考えられる。しかし、昨今の核家族化や地域のつながりの低下などにより子育て家庭は孤立しやすく周囲からその様子が分かりにくいいため、母親がサポートを受けるためには自ら

相談したり援助を要請したりする必要がある。

近年、社会全体で子育て家庭を支えるための政策や取り組みが重要視され、子育て支援施設やイベント、サービス数も増加している。その一方で、問題があるにも関わらず相談の必要性を感じていない親がいることや（浜本・永田, 2011）、支援が必要であるのに助けを求められず支援を活用できない母親たちの存在が指摘されている（小嶋, 2004）。また地域子育て支援センター事業への非参加者は参加者と同様に高い支援欲求を持っているが参加をしておらず、他の支援機関ともコンタクトをあまり取らないことが指摘されている（神田・山本, 2008）。母親にニーズがあることや役立ちそうな支援があることと、実際に援助を要請するか、支援を利用するかどうかは別の問題であり（小嶋, 2007）、母親が自ら相談をしたり援助を求めた

1 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

2 広島大学教育学研究科附属幼年教育研究施設

りしようとする意識を高め、行動を促進するように働きかける必要があると考えられる。

病院でのカウンセリングや学校での相談の在り方を利用者の視点から考える際には、援助要請に着目した研究が行われている（森岡, 2007）。これらの研究では、援助を求めることに対する態度や認知である「被援助志向性 (help-seeking preference)」が低い人に対する介入や被援助志向性が低い人のための援助システムの構築へ結びつく研究の必要性が指摘されている（水野・石隈, 1999）。母親への支援を考えるにあっても、実際に母親が援助行動に移るまでの心理的側面に着目し、母親の被援助志向性の実態やこれに影響を与える要因について検討する必要があると考えられる。

援助要請はストレス対処方略の1つであるとともに、ストレス状況では自身の主観的安全性を保とうとする愛着システムが活性化されることが指摘されており（金政・大坊, 2003）、愛着の内的作業モデル (Internal working model: IWM) と援助要請行動との関連が指摘されている。IWM は Bowlby (1973 黒田他訳 1991) が想定した愛着対象との相互作用によって個人に内在化された愛着対象や自己についての表象である。愛着対象が全体として助けや保護を求めた時に応答してくれる類の人であると判断されるかどうか（他者観）、また自分は特定の愛着対象からだけでなく、誰からも助けを得られる人間であると判断するかどうか（自己観）という2つの変数によって構成されている。

成人期の IWM の測定尺度としては、Brennan, Clark, & Shaver (1998) の ECR (Experiences in Close Relationships inventory) が多くの研究で使用されている（島, 2010）。ECR は Avoidance (親密性の回避：親密な関係を回避する傾向) と Anxiety (見捨てられ不安：他者との関係における不安) の2次元で構成されている。IWM の他者観は、他者の利用可能性や支援への期待を示しており、他者観がポジティブであることは、親密性を希求し回避が少ないこと、つまり「親密性の回避」の低さとして現れる。自己観は、自己の価値意識を示しており、自己観がポジティブであることは、他者との関係に対する不安の低さ、つまり「見捨てられ不安」の低さとして現れる (Griffin & Bartholomew, 1994) と考えられている。

IWM と援助要請との具体的な関連としては、「親密性の回避」が高いほど援助要請行動が少

なく、非直接的援助要請（ほのめかし、不機嫌）が多いこと (Collins & Feeney, 2000) や「親密性の回避」と「見捨てられ不安」の両者が低い場合にサポート探求行動が増加すること (Simpson, Rholes, Campbell & Wilson, 2003) が示唆されている。さらに、成人は愛着行動を行う際に、自分の主観的安全性だけでなく、自他の適切な心理的距離の調整にも焦点を当てており、心理的距離の調整をすることによって他者に対する気兼ねや遠慮、自己防衛が入り込む可能性が指摘されている。中尾・加藤 (2006) は、心理的距離の調整を強調するために、具体的な愛着行動の内容とそれを行う理由を含んだ項目からなる成人愛着行動尺度 (AABS: Adult Attachment Behaviors Scale) を作成し、IWM との関係性を調査した。そして、「見捨てられ不安」の高い愛着型である「とらわれ型」と「恐れ型」の場合に心理的距離の調整にとらわれ、愛着行動に対し必要以上の自己制御を行い行動が抑制されると指摘している。ここでは、IWM に基づいて個々の対人関係が規定されるという考え方から「見捨てられ不安」と心理的距離の調整は対にして解釈されているが、IWM と特定の対象との心理的距離にはどの程度関連があるのだろうか。IWM は個人内で比較的安定したものである一方で、ライフイベントにおける重要な他者との関係により IWM が更新される場合もあることが指摘されており (岡島, 2008)、特定の対象との心理的距離は必ずしも IWM によって規定されるわけではないと考えられる。したがって、IWM と特定の対象との心理的距離は個別に解釈し、それぞれが援助要請に与える影響を検討する必要があると考えられる。

援助要請研究においては、援助要請者と援助要請対象との関係性を考慮する必要があること (脇本, 2008) が指摘されている。また、母親を対象とした研究においても、母親の抱える問題の量や深刻さによって援助要請の回数や援助要請をする対象が異なることが指摘されており (本田・新井, 2010)、援助者の特性によって親が期待する援助や影響が異なることが指摘されている (浜本・永田, 2011)。これらのことから、母親の援助者との関係性の認知が影響を与えると考えられる。

以上をふまえて本研究では、乳幼児をもつ母親の被援助志向性を「子育てに関する悩みについて他者に援助を求めるかどうかについての認知的枠組み」と定義し、母親の被援助志向性の実

態とその影響要因について検討を行った。要因としては、一般的な対人関係のモデルとなっている IWM と、特定の援助要請対象との関係性の認知を表す心理的距離の2つを取り上げた。

心理的距離は「自己が、ある他者との間で、どれほど強く心理的な面でつながりを持っていると感じ、どれほど強く親密で理解し合った関係を持っていると感じているかの度合」である(金子, 1989)。心理的距離には行動によって示される表出的距離と、本心としての表象的距離とがあるが、本研究では援助要請対象との心理的距離の認知の影響を検討するので、内的な表象レベルの心理的距離を取り上げる。対人関係においては、自己の相手に対する心理的距離(能動表象)だけでなく、相手の自己に対する心理的距離を推測し(受動表象)、それらに基づいて相手への行動を調整していると考えられる(山根, 1987)。

本研究の仮説は以下の通りである。

仮説1. 「親密性の回避」は他者の利用可能性や支援への期待を表していることから、「親密性の回避」が高い人は、他者は自分を助けてくれる・信頼できる存在であると捉えにくいいため、援助欲求や援助効果への期待は低くなり、相手の応答性にも期待が持てないのではないかと考えられる。したがって、「親密性の回避」が高いほど、被援助に対する「肯定的態度」は低くなり、「懸念や抵抗感」は高くなると考えられる。

仮説2. 「見捨てられ不安」は、自己への価値意識を示しており、「見捨てられ不安」が高い場合、相手からの応答性が得られないという懸念が生じたり、応答を受けられないことでさらに自分の価値が低められることを恐れたりすると考えられる。したがって、「見捨てられ不安」が高いほど、被援助に対する「懸念や抵抗感」は高くなると考えられる。

仮説3. 「能動表象」の値が大きいことは、自分から援助要請対象への心理的距離が遠いことであり、援助要請対象と心理的な面でのつながりが薄い、もしくは相手は自分を理解してくれる相手だと思っていないと解釈できる。心理的につながりが薄い人に対して援助欲求は生じず、また理解してくれる可能性の低い人に相談しても援助効果は期待できない。したがって「能動表象」の値が大きいほど、被援助に対する「肯定的態度」は低くなり、「懸念や抵抗感」は高くなると考えられる。

仮説4. 援助要請対象との心理的距離に差があ

る場合、相手の立場を考慮して相手の反応や対応を推測すると考えられる。その際に遠慮や懸念が生じると考えられ、能動表象と受動表象が一致していない場合、一致している場合よりも「肯定的態度」は低くなり「懸念や抵抗感」は高くなると考えられる。

## 方法

### 調査対象者

乳幼児をもつ母親509名に質問紙を配布した。230部回収したうち、回答が有効であった216名(有効回答率42.4%)を調査対象者とした。

### 実施方法

保育園のクラス担任・子育て支援センターの支援員を通じて母親へ質問紙を配布し、保育園・支援センター内に設置した回収ボックスで回収した。

### 質問紙の構成

#### 1) フェイス項目

母親の年齢、就労形態、家族形態、子どもの人数、年齢、性別を尋ねた。

#### 2) 被援助志向尺度

本田・新井・石隈(2011)の中学生の友人・教師・家族に対する被援助志向性尺度を参考に母親の身近な人(夫・親・友人)、専門家(保育士・保健師・子育て相談員)に対する被援助志向性を測定できるように修正した。具体的には、項目文中の「援助者」にあたる部分を、身近な人に対する被援助志向性尺度では「□□」に、専門家に対する被援助志向性尺度では「△△」に修正した。□□には、夫・親・友人のうち最も相談しようと思う人を援助要請対象として選択させ、その人を当てはめて回答させた。△△には、保育士・保健師・子育て相談員のうち最も相談しようと思う人を選択させ、その人を当てはめて回答させた。この尺度は、援助の欲求や態度、援助の活用についての項目からなる「被援助に対する肯定的態度」と自己への汚名の耐性、援助者の呼応性・援助効果についての懸念についての項目からなる「被援助に対する懸念や抵抗感」の2下位尺度によって構成されている。教示文は「以下の文章は、子育てにおいて悩みや問題があり、自分一人で解決することが難しい時のあなたの気持ちにどの程度当てはまりますか」とし、5件法(「1:あてはまらない」、「2:あまりあてはまらない」、「3:どちらでもない」、「4:ややあてはまる」、「5:あてはまる」)で回答を求めた。

### 3) 一般他者版愛着スタイル尺度 (ECR-GO)

中尾・加藤 (2004) によって作成された尺度を使用した。一般他者に対する愛着スタイルを構成する2因子(「親密性の回避」と「見捨てられ不安」)を測定するための多項目式尺度であり、36項目で構成されていた。これらの項目について、「以下のそれぞれの文は、あなたが対人関係の中で一般的に体験している気持ちや感じ方にどのくらい当てはまりますか」と教示し、7件法(「1:全くあてはまらない」、「2:ほとんどあてはまらない」、「3:あまりあてはまらない」、「4:どちらでもない」、「5:ややあてはまる」、「6:よくあてはまる」、「7:非常によくあてはまる」)で尋ねた。

### 4) 心理的距離

美山 (2003) の心理的測定法を使用した。この測定法は、天貝 (1996) の心理的距離測定法を、能動表象のみでなく受動表象も測定できるように修正したものである。能動表象の測定では、9.5cmの線分と自分を表す○と援助要請対象を表す●を使用して、Figure 1のような図を提示した。能動表象の測定では「あなたが一番左の○のところにいるとします。一番右端は全く知らない人とします。援助要請対象として選択した人(□□/○○)はあなたの気持ちからどのくらいの距離にいますか。直線上に●を付けてください。」と教示し、受動表象の測定では、「援助要請対象として選択した人(□□/○○)が一番左の●のところにいるとします。一番右端はその人がまったく知らない人とします。その人の気持ちからあなたはどのくらいの距離にいますか。直接上に○を付けてください。」と教示した。

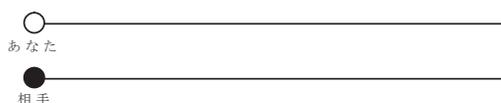


Figure 1. 心理的距離測定法

## 結果

### 調査対象者の概要

母親の年齢は、30代147名(68.1%)が1番多く、次いで40代37名(17.1%)、20代31名(14.4%)であり、20歳未満、50歳以上はいなかった。就労形態は、常勤99名(45.8%)、パートタイム65名(30.1%)であり75.9%が働く母親であった。また専業主婦は41名(19.0%)であっ

た。家族形態は、核家族世帯179名(82.9%)、3世代世帯21名(9.7%)、単身家族10名(4.6%)であり大多数が核家族世帯であった。子どもの数は1人75名(34.7%)、2人104名(48.1%)、3人31名(14.4%)、4人5名(2.3%)であった。

### 尺度構成と得点化

#### 被援助志向性尺度

身近な人(夫、親、友人)のうち、最も相談しようと思う人を1人選択させたが、各対象を選択した人は、夫113名(52.3%)、親46名(21.3%)、友人38名(17.6%)、無回答19名(8.8%)であった。また、専門家においては、保育士151名(69.9%)、保健師18名(8.3%)、子育て相談員27名(12.5%)、無回答20名(9.3%)であった。身近な人・専門家に対する被援助志向性尺度の各項目の平均値と標準偏差を計算し得点分布を確認したところ多くの項目で天井効果がみられた。最も相談したい人への被援助志向性を測定したことが、その原因の1つとして考えられたため、今回の分析では内容的妥当性を重視し、すべての項目を分析に使用することとした。本田他(2011)に基づき、「肯定的態度」と「懸念や抵抗感」の2下位尺度に項目を分け、各下位尺度を構成する項目の合計得点を場面ごとに算出し因子得点とした。

#### ECR-GO

中尾・加藤(2004)に基づき、「親密性の回避」と「見捨てられ不安」の2下位尺度に分け、下位尺度を構成する項目の合計得点を因子得点とした。

#### 心理的距離

身近な人、専門家それぞれにおける能動表象と受動表象について、点間距離を0.5cmとし20段階(0-19)で評定した。援助要請対象が身近な人の場合の方が、専門家の場合より能動表象と受動表象ともに値が小さかった(Table 1, 2)。また、心理的距離の差(能動表象-受動表象)を算出し、能動表象の方が受動表象より近い群(差の値が負)を能動<受動群、能動表象と受動表象が一致している群(差が0である群)を一致群、受動表象の方が能動表象より近い群(差が正の値)を能動>受動群とした。

### 被援助志向性、IWM、心理的距離の関係

被援助志向性とIWM、心理的距離の関係を検討するために、各変数間の相関係数を算出した(Table 1, 2)。その結果、援助要請対象が身

Table 1 各変数の平均値, 標準偏差と相関係数 (身近な人)

	M	SD	2	3	4	5	6
1. 肯定的態度	24.7	3.6	-.43**	-.29**	-.13 <sup>†</sup>	-.36**	-.38**
2. 懸念や抵抗感	12.6	5.2	—	.43**	.42**	.40**	.39**
3. 親密性の回避	62.1	15.6	—	—	.41**	.10	.18**
4. 見捨てられ不安	53.5	17.2	—	—	—	.12 <sup>†</sup>	.17*
5. 能動表象	2.5	2.9	—	—	—	—	.64**
6. 受動表象	3.3	3.4	—	—	—	—	—

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , <sup>†</sup> $p < .10$

Table 2 各変数の平均値, 標準偏差と相関係数 (専門家)

	M	SD	2	3	4	5	6
1. 肯定的態度	21.9	4.7	-.33**	-.26**	-.13 <sup>†</sup>	-.44**	-.31**
2. 懸念や抵抗感	13.8	5.2	—	.38**	.43**	.41**	.32**
3. 親密性の回避	62.1	15.6	—	—	.41**	.18*	.16*
4. 見捨てられ不安	53.5	17.2	—	—	—	.08	.10
5. 能動表象	9.0	4.6	—	—	—	—	.71**
6. 受動表象	10.0	4.9	—	—	—	—	—

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , <sup>†</sup> $p < .10$

Table 3 IWM, 心理的距離と援助志向性との関連

		被援助志向性			
		身近な人		専門家	
		肯定的態度	懸念や抵抗感	肯定的態度	懸念や抵抗感
IWM	親密性の回避	-.24**	.29**	-.31**	.19**
	見捨てられ不安	.02	.26**	-.28**	.32**
心理的距離	能動表象	-.31**	.34**	-.41**	.35**
	(df)	(3, 212)	(3, 212)	(3, 212)	(3, 212)
	F 値	17.00**	40.67**	29.97**	38.07**
	AdjR <sup>2</sup>	.18	.36	.29	.34

値は標準偏回帰係

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

身近な人, 専門家のどちらの場合にも, 「肯定的態度」と「懸念や抵抗感」は負の相関があった。また「肯定的態度」は「親密性の回避」・「能動表象」・「受動表象」と負の相関があり, 「懸念や抵抗感」は「親密性の回避」・「見捨てられ不安」・「能動表象」・「受動表象」と正の相関があった。IWM と心理的距離の間には相関はほとんど認められなかった。さらに, 「受動表象」と「能動表象」の間には強い正の相関があった。

#### IWM と心理的距離が被援助志向性に与える影響

IWM と心理的距離が被援助志向性にどのような影響を与えているかを検討するために, 被援助志向性を構成する「肯定的態度」と「懸念や抵抗感」のそれぞれを従属変数とし, 「親密

性の回避」, 「見捨てられ不安」, 「能動表象」を独立変数とした重回帰分析を行った。「受動表象」は「能動表象」と相関が高いため分析から除外した。援助要請対象が身近な人の場合, 「肯定的態度」には「親密性の回避」と「能動表象」が負の影響を与えていた。また「懸念や抵抗感」には「親密性の回避」, 「見捨てられ不安」, 「能動表象」が正の影響を与えていた。援助要請対象が専門家の場合, 「肯定的態度」には, 「親密性の回避」と「能動表象」が負の影響を, 「見捨てられ不安」が正の影響を与えていた。また「懸念や抵抗感」には「親密性の回避」, 「見捨てられ不安」, 「能動表象」が正の影響を与えていた (Table 3)。

## 心理的距離の差による被援助志向性の相違

能動表象と受動表象の関係により3群に分類した。これらの3群を独立変数、被援助志向性の下位尺度を従属変数として分散分析を行った。その結果、身近な人の場合、群間で有意差が認められ（肯定的態度： $F(2,213)=9.40, p<.01$ 、懸念や抵抗感： $F(2,213)=9.99, p<.01$ ）、多重比較の結果、一致群は能動>受動群、能動<受動群よりも、肯定的態度が高く、懸念や抵抗感が低かった。また能動<受動群は能動>受動群よりも肯定的態度が高かった。一方、専門家の場合には群による差は認められなかった（肯定的態度： $F(2,213)=1.13, n.s.$ 、懸念や抵抗感： $F(2,213)=0.98, n.s.$ ）。各群の人数と、平均値、標準偏差をTable 4に示した。

Table 4 群ごとの被援助志向性得点の平均値と標準偏差

		能動<受動	一致	能動>受動
身近な人		n=84	n=103	n=29
肯定的態度	M	24.3	25.7	22.7
	SD	(0.4)	(0.3)	(0.7)
懸念や抵抗感	M	13.4	11.2	15.3
	SD	(0.5)	(0.5)	(0.9)
専門家		n=104	n=64	n=48
肯定的態度	M	21.6	22	20.7
	SD	(0.5)	(0.6)	(0.7)
懸念や抵抗感	M	13.7	13.4	14.7
	SD	(0.5)	(0.9)	(1.0)

## 考 察

本研究の目的は、乳幼児をもつ母親の被援助志向性について調査し、IWMと心理的距離が与える影響について検討することであった。まず、本研究では母親が最も援助を求めたい相手を選択させたが、多くの母親が夫や保育士を重要な援助要請対象として認識していることが明らかになった。核家族世帯が80%以上を占め、75%以上の母親が有職者であることを考慮すると、日々接する機会があり、話をしたり相談したりする機会のある夫や保育士が援助要請者として最も期待されるのかもしれない。

IWMと心理的距離の間にはほとんど相関がなく、IWMと特定の対象との関係性は個別に捉える必要があると考えられた。以下、IWMと心理的距離のそれぞれが被援助志向性に与える影響について考察する。

「親密性の回避」は「肯定的態度」に負の影

響を、「懸念や抵抗感」に正の影響を与えており、「親密性の回避」が高いほど被援助に対する肯定的態度が低く、被援助に対する懸念や抵抗感が高くなることが明らかになった。これは仮説1を支持し、親密性の回避が高いほど援助要請行動が少ないという指摘（Collins & Feeney, 2000）とも一貫する結果である。またこの結果から「親密性の回避」が高い場合に、他者の利用可能性や支援効果を期待できず、相手からの応答性に自信を持ってないことが援助要請行動を抑制する一因となる可能性が示唆される。

また「見捨てられ不安」は「懸念や抵抗感」に正の影響を与えており、「見捨てられ不安」が高いほど、被援助に対する懸念や抵抗感が高いことが示唆された。この結果は仮説2を支持するものである。「見捨てられ不安」が高い場合、自己観はネガティブであり、自分は助けが必要などきに他者から助けてもらえる存在であるという確信を持たず、相手から適切に応答されないことによって自己価値をさらに低めてしまう可能性を懸念し避けるのではないかと考えられる。

さらに「見捨てられ不安」は、援助要請対象が専門家の場合、「肯定的態度」に正の影響を与えているが、身近な人の場合は影響がなかった。つまり、自己観がネガティブであるほど、専門家に援助を求めることに対して肯定的になることが示唆された。自己観の低さは自尊心の低さとの関連が指摘されており（Collins & Read, 1990）、自己観がネガティブな場合、一人で問題を解決できるか不安であるため、他者への援助欲求が高まるのではないかと考えられる。また子育ての悩みに関しては、子どもや子育てに詳しい専門家に頼る方が解決に繋がりやすいと考えるために、専門家に対してのみ影響が見られたのではないかと考えられる。しかし、自己観がネガティブであることは「懸念や抵抗感」と関連しており、援助欲求と懸念や抵抗感が同時に高まる場合が考えられる。その場合、相談したい気持ちはあるが、懸念や抵抗感によってできないといった葛藤が母親に生じる可能性が考えられる。

「能動表象」は「肯定的態度」に負の影響を、「懸念や抵抗感」に正の影響を与えており、「能動表象」の値が大きいほど、つまり自分から相手への心理的距離が遠いほど、被援助に対する肯定的態度が低く、被援助に対する懸念や抵抗感が高くなることが明らかになった。これは、

仮説3を支持する結果であり、母親が援助要請対象を自分を理解してくれる存在で、親密な関係にあるとみなしているほど、その人への被援助志向性が高まることが示唆された。また身近な人の場合、援助要請対象との心理的距離が一致していない母親は一致している母親と比較して被援助志向性が低いことが示唆された。一方、専門家の場合には心理的距離の差による被援助志向性の相違は見られなかった。仮説4は、援助要請対象が身近な人の場合のみ支持された。以上より、身近な人に対しては、母親が援助要請対象を心理的に近いと感じているかだけではなく、相手との距離感も意識しており、心理的距離の相違があると認知している場合には、必要以上に介入されるかもしれないという懸念や、期待したほど応答してもらえないかもしれないといった心配から援助要請に対してためらいが生じる可能性が考えられた。一方、専門家の場合には母親と援助要請対象との関係性の認知よりも、いかに母親が専門家を信頼するかが重要であると考えられる。

以上より、一般的な対人関係行動の基盤となるIWMと特定の対象との心理的距離のそれぞれが母親の被援助志向性に影響を与えていることが示唆された。母親のパーソナリティ要因であるIWMが被援助志向性に影響を与えていることから、子育て支援においては、母親の現在の悩みやストレス・ニーズなど母親の現状に対処していただくだけではなく、妊娠時や出産時に母親のIWMや対人行動を把握することによって問題を抱えやすい母親をスクリーニングし予防的に支援していく必要があると考えられる。支援を得られる場所の詳細情報を伝えたり、援助要請スキルを教育したりする機会を設けることが有用であると考えられる。また、妊娠期の間に配偶者を利用可能で支持的で受容的であると認知した場合に、Anxious型の女性がSecure型に移行したり、反対に配偶者のサポートを求めなかった人はよりAvoidant型になったりすることが指摘されており(Simpson et al., 2003)、妊娠期に他者から援助される経験は、個々の関係性を深め、IWMを更新する機会にもなりうると考えられる。これをふまえると、母親を対象とした支援だけでなく、夫や家族など母親の援助者となりうる人を巻き込み援助関係を築けるような取り組みも必要だろう。

## 本研究の限界と今後の展望

本研究の調査対象となった母親は被援助に対して肯定的であり、懸念や抵抗感が低い人が多かった。しかし、中には被援助志向性が低い人もおり、これまで援助を利用できない母親の存在が指摘されていることをふまえると、子育てをしている母親が全体として被援助志向性が高いとは考えにくい。実際に、問題を一人で抱えてしまいやすい母親に対する有効な支援を考えるためには、被援助志向性が低い人への調査を行うこと、またその方法を工夫する必要があるだろう。

また本研究では、母親の実際の援助要請行動の頻度や様相は調査しておらず、被援助志向性と援助要請行動との関連については詳細に言及することができなかった。今後、被援助志向性と援助要請行動の頻度や援助要請の仕方との関係についても検討する必要がある。

## 引用文献

- 天貝由美子 (1996). 中・高校生における心理的距離と信頼感との関係 カウンセリング研究, **29**, 130-134.
- 荒牧美佐子・無藤 隆(2008). 育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い：未就学児を持つ母親を対象に 発達心理学研究, **19**, 87-97.
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss: Vol.2 Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books.
- (J・ボウルビィ, 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子(訳)(1991). 母子関係の理論 II 分離不安 岩崎学術出版社)
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998). Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson, & W. S. Rholes(Eds.), *Attachment theory and close relationships*. New York: Guilford Press. pp.46-76.
- Collins, N. L., & Feeney, B. C. (2000). A safe haven: an attachment theory perspective on support seeking and caregiving in intimate relationships. *Journal of personality and social psychology*, **78**, 1053-1073.
- Collins, N. L., & Read, S. J. (1990). Adult attachment, working models, and relationship quality in dating couples. *Journal of personality and social psychology*, **58**, 644-663.

- Griffin, D., & Bartholomew, K. (1994). Models of the self and other: Fundamental dimensions underlying measures of adult attachment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 430-445.
- 浜本真規子・永田雅子 (2011). 親子教室に参加する親の援助要請を支える要因 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, **58**, 113-118.
- 本田真大・新井邦二郎 (2010). 幼児を持つ母親の子育ての悩みに関する援助要請行動に影響を与える要因の検討 カウンセリング研究, **43**, 51-60.
- 本田真大・新井邦二郎・石隈利紀 (2011). 中学生の友人, 教師, 家族に対する被援助志向性尺度の作成 カウンセリング研究, **44**, 254-263.
- 金子俊子 (1989). 青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究 青年心理学研究, No.3, 10-19.
- 金政祐司・大坊郁夫 (2003). 青年期の愛着スタイルと社会的適応, **74**, 466-473.
- 神田直子・山本理絵 (2001). 乳幼児を持つ親の, 地域子育て支援センター事業に対する意識に関する研究—子育て支援事業参加者と非参加者の比較から— 保育学研究, **39**, 216-222.
- 北村真弓・土屋直美・細井志乃ぶ (2006). 子どもの年齢別にみた母親の育児ストレス状況とストレス関連要因の検討—父親との比較に焦点をあてて— 日本看護医療学会雑誌, **8**, 11-20.
- 小嶋玲子 (2004). 母親たちの子育てに対する現状認識と必要としている援助 桜花学園大学保育学部研究紀要, No.2, 59-74.
- 小嶋玲子 (2007). 子育て支援への新しい視点—援助要請行動, 被援助志向性からの検討— 桜花学園大学保育学部研究紀要, No.5, 1-17.
- 美山理香 (2003). 大学生の友人との心理的距離に関する基礎的研究 九州大学心理学研究, **4**, 27-35.
- 水野治久・石隈利紀 (1999). 被援助志向性, 被援助行動に関する研究の動向 教育心理学研究, **47**, 530-539.
- 森岡さやか (2007). メンタルヘルス領域における援助要請研究の動向と新たな可能性への提言 東京大学大学院教育学研究科紀要, **47**, 259-267.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, **5**, 19-27.
- 中尾達馬・加藤和生 (2006). 成人愛着スタイルは成人の愛着行動パターンの違いを本当に反映しているのか パーソナリティ研究, **14**, 281-292.
- 岡島泰三 (2008). 内的作業モデルの変化に関する研究の展望と今後の課題 関西学院大学臨床教育心理学研究, **3**, 33-39.
- 島 義弘 (2010). 愛着の内的作業モデルが対人情報処理に及ぼす影響—語彙判断課題による検討— パーソナリティ研究, **18**, 75-84.
- Simpson, J. A., Rholes, W. S., Campbell, L., & Wilson, C. L. (2003). Changes in attachment orientations across the transition to parenthood. *Journal of Experimental Social Psychology*, **39**, 317-331.
- 山根一郎 (1987). 心理的距離と面識度水準の効果にもとづく対人経験の分析 心理学研究, **57**, 29-334.
- 脇本竜太郎 (2008). 自尊心の高低と不安定性が被援助志向性・援助要請に及ぼす影響 実験社会心理学研究, **47**, 160-168.